

イギリスにおける認知症高齢者施設の現状

The Present Condition of Care Home for Older People with Dementia in the United Kingdom

三富 道子

MITOMI michiko

はじめに

イギリスにおける認知症の介護の問題は、わが国と同じように高齢者人口の増加とともに、大きな社会問題である。認知症高齢者の「介護の質」をめぐる論議は盛んであり、課題でもある。イギリス保健省はこうしたことから、2009年2月に政策文書『認知症とともに上手に生活すること：認知症戦略』¹⁾を発表している。戦略の目的の1つに、ケアホームで認知症とともに上手に生活することを挙げている。

筆者は、2009年8月にエジンバラ (Edinburgh City) 市内にある2つの認知症高齢者施設を訪れ、介護の実態と「介護の質」にかかわる職員の職業訓練がどのように行われているかを知るために、施設内部の見学とホームマネージャーから聴き取り調査を行っている。施設の選定に当たっては、設置主体を考慮している。調査の内容をここに報告する。

1. マリオンビル・コート・ケアホーム (Marionvill Court Care Home)

この施設は、エジンバラ市が所有し運営する15の自治体立ケアホームの1つであり、エジンバラ市の高齢者管理グループ (Older People's Management Group) に所属し、高齢者サービスマネージャーであるマリオン・ランドール (Marion Randall) 氏より、紹介された高齢者介護及び認知症介護を行っている施設である。エジンバラ市の中心地から、路線バスで15分弱の距離にありイギリスの高齢者施設の例にもれず、閑静な住宅街の中にある (写真2)。木をふんだんに使用した明るくモダンな建物である (写真1)。



写真1

マリオンビル・コート・ケアホームの外観



写真2 施設に隣接する住宅街

施設の入り口正面には、広い駐車場がある。この施設は、50年の歴史を持つ施設から、2年前に建て替えられたものである。建て替えに当たっては、入居者の希望を聞き、1枚のボードに施設理念として記入され、現在も大切に保管されている。建物は2階建てで全室個室のユニット型であり、6ユニットを有する。施設内に入るには、入り口のエントランスホールに記帳簿があり、訪問者の名前と訪問時間、目的の記入を求めている。この1ユニットには、10ベッドルーム、食堂とラウンジ、バスルーム、汚物処理室がある。各ベッドルームには、トイレ、シャワールーム、洗面所が備わっている（写真3、4、5）。バスルームは共用で、入居前の生活習慣を尊重する見地から、バスタブを希望する場合に使用する。



写真3 ベッドルーム



写真4 洗面台とシャワールーム

全室とも大きな窓に面しカラフルなカーテンがかかっている。また、入居者の好みに合わせたベッドカバーや飾り付けがされている（写真3,6）。部屋の大きさは、ケア委員会で決められていると、ホームマネージャーの説明であった。食事は、厨房で作られ保温された台車で運び食堂で食べる。この日の昼食のメニューは、オレンジジュースとソーセージ、クリームシチューとパンであった。



写真5 ベッドルーム内のトイレ



写真6 ベッドルーム内の飾りつけ

認知症のユニットは、6ユニットのうちの1つである。ベッドルームやバスルーム、食堂、ラウ

ンジなど認知症のユニットの構造に、他のユニットとの違いはない。ただし、認知症の人ために、いくつかの工夫が凝らされている。食堂には、果物などのシールが貼られわかりやすく表示し、廊下にもシールや絵画を飾ることで、利用者が場所を確認できるようにしてあった。ベッドルームでは、利用者自身が衣服を選択できるように、クローゼットをガラス張りにし、衣服が見えるようになっていた。



写真7 廊下の壁面のシールと絵画



写真8 ガラス張りのクローゼット

この施設は、入居者60名に対し職員が102名と非常に多く雇用されている。訪問時間が12時と昼食の時間帯であったが、職員が1ユニット内に少なくとも3人はいた。日本のユニットケアを提供している標準職員の配置と比較しても、はるかに多い。102人の内訳は、聴き取り調査を行った、ユニットマネージャーのエレーン・ヒース (Mrs. Elaine Heath) 夫人と6名のアシスタントマネージャーをはじめ、14名の上級ケアスタッフ (Senior care staff) 及びケアアシスタント (care assistant)、60名の家事担当者がいる。60名のうち、3名は調理担当、2名の洗濯や修繕の担当者がいる。60名は、上級ケアスタッフが管理している。また、入居者は、自宅で利用していた介護者を継続して利用することが可能で、必要な時にサービス提供を受けることができる。平均勤続年数は20～30年と長く、離職率は際立って低い。それぞれが有する職業資格をみると、上級ケアスタッフは、スコットランド職業資格 (Scottish Vocational Qualification, SVQ)²⁾のレベル3、ケアアシスタントがレベル2である。採用後に職業訓練を経て有資格者となっている。働きながら、ソーシャルケア修士や経営学修士 (Master of Business Administration, MBA) の資格も取得できるとの事であった。ユニットマネージャーは、ソーシャルケア修士取得者であった。

この施設で認知症の介護に対する職業訓練は、スターリング大学³⁾と提携しながら実施しており、スターリング大学が行う6～7週間の認知症ケアのトレーニングを受けることができる。また、施設に認知症介護の訓練をしてくれるスターリング大学の講師陣を招いて、施設全体の訓練も行っている。ただし費用は2万ポンドと高価である。

認知症の入居者のターミナル期の意思決定は、入居者の子供と話し合い子供が最終的に行う。次のケア内容も毎回子供と話し合いながら次のケアの内容を決定するということであった。



写真9 上級ケアスタッフの管理表

認知症のユニットには、ナンバーキーによる施錠が施行され、入居者は自由に外に出ることはできない。

2. キャッスルグリーン・ケアホーム (The Castle Green Care Home)

この施設は、フォー・シーズン・ヘルスケア (FOUR SEASON HEALTH CARE) が運営する民営の高齢者施設の一つであるとともに、フォー・シーズン・ヘルスケアが PEAL (Positively. Enriching. And enhancing. Residents. Lives) と名付ける認知症サービス (SPECIALISED DEMENTIA SERVICE) を専門にするケアホームの一つでもある。

フォー・シーズン・ヘルスケアは、イングランドに 230、スコットランドに 50、北アイルランドとマン島で 65 のケアホームを運営し、イギリス全土に医療・福祉サービスを展開する最大の企業の一つである。この会社は、1980 年代後半に設立され、現在ケアホームとナーシングホームおよび特別な部署で 1 万 5,000 人以上が、また 2 万 1,000 人以上の職員が雇用されている。キャッスルグリーン・ケアホームは、エジンバラ中心地から路線バスで 20 分強の住宅街の中にある。エジンバラ市が建設し、運営をフォー・シーズン・ヘルスケアに委託している。施設の周辺と施設の概観は、写真 10.11 のようである。



写真 10 施設に隣接する住宅



写真 11 施設の外観

この施設もユニット型であり、60 名が入居している。認知症のユニットは、2 つあり認知症の程度により区分されている。今回の聴き取りは、エイリーン・バーンズ (Eileen Burns) ホームマネージャーからのものであり、氏は看護師資格を有する。職員は、入居者 3.3 人にケアワーカーが 1 人、入居者 10 人に対して看護師が 1 人配置されている。夜間は、入居者 5 人に対してケアワーカー 1 人が配置されている。この施設でも、日本と比較すると職員の配置が潤沢である。とりわけ、夜間における人員配置は、日本の多くのユニットケアの施設が 2 ユニット 1 介護職員であることを考えると、手厚いといえる。また、この施設には、パーソン・センタード・ケアの理念を唱えた英国ブラッドフォード大学 (University of Bradford) トム・キットウッド (Tom Kitwood) 教授が開発した認知症ケアマッピング (Dementia Care Mapping DCM) の研修を受けた認定トレーナーであるマッパーが 3 人いる。職員は最低でも SVQ レベル 2 のトレーニングを受けている。職員の採用基準は、まれに経験の無いものも採用するが、一般には SVQ レベル 2 を有し、経験のあることが望ましいとしている。認知症のユニットの職員は、認知症の知識が求められる。

職員の職業訓練は、スターリング大学と連携し 9 ヶ月の訓練を受ける。必須の職業訓練としては、法律で義務付けられている基礎的訓練があり、内容は感染、保護、火災訓練、薬物などである。認知症の訓練は、フォー・シーズン・ヘルスケアによるトム・キットウッド教授の理論に基づくカリ

キュラムを有する。その担当者は、認知症ケアトレーナーや認知症ケアアドバイザーが担っている。認知症ユニット（写真 12）は、中庭をはさんで食堂とベッドルーム、バスルームと2つのラウンジで構成され、各フロアが三角形の形をしている。日本の回廊型施設に似ているが、その規模は極めて小さい。廊下には、それぞれ飾り付けがしてあり、楽器や王室関係などテーマごとにディスプレイしてある（写真 13）。また、触れたときの感触を楽しむものも壁に飾られている。



写真 12 中庭と廊下



写真 13 王室関係でディスプレイされた廊下の壁面



写真 14 壁に飾られ感触を楽しむ品々



写真 15 楽器でディスプレイされた廊下の壁面

各ベッドルームのドアには、入居者の略歴と顔写真が掲示してある。ベッドルームにはトイレとシャワールーム及び洗面台がある。



写真 16 ベッドルーム



写真 17 ベッドルーム内のシャワー・トイレ

ベッドルーム内には、緊急警報がついており、職員だけが停止する鍵を有する。また、認知症ユニットの出入り口にはナンバーキーにより、施錠されている。家族の訪問時には、テレビつきインターホンで家族を確認した後に開錠される。

食堂は、認知症の利用者にあわせ、日にち、曜日、天気が表示されている。食堂にはキッチンがあり、利用者と一緒に使用した食器を洗ったりすることができるようになっている。見学時も、女性の利用者が職員とともに、ティーカップを洗っていた。

中庭では、利用者と一緒に植えたというプランターがあり、ウサギも飼っていた。家族の面会は自由であり、見学時も2組の親族が訪問していた。また、毎日ご主人が入浴と食事の介助に訪問される入居者もあった。

ターミナル期の認知症の方は、施設で最後を迎えるということであった。病院へは、医療的なサービスが必要な時以外は、搬送しないとのマネージャーからの話である。その理由は、死のプロセスについて十分な知識を職員が有しているからであるとも話された。マリオンビル・コート・ケアホームと比較するならば、ホームマネージャーも看護資格を有し、看護師資格の職員が多いことがその理由であると思われる。

おわりに

今回訪問した2つの認知症高齢者施設には、共通するところがある。1つには、日本に比較し職員の人員配置が潤沢である。また、認知症介護の職業訓練は、ともにスターリング大学と連携しながら実施しているところである。また、認知症のフロアは、ナンバーキーにより施錠され、利用者が自由に出入りできないことである。ベッドルームには、トイレ、シャワー、洗面台がしつらえてあることも同じである。

両施設の違いは、職員の構成である。マリオンビル・コート・ケアハウスでは、ソーシャルワークの専門家がマネージャーであり、SVQレベル3の有資格者が資格のない職員を管理している。他方、キャッスルグリーン・ケアホームは、看護師資格者が多数勤務する。これらのことが、ターミナル期の対応にも違いとして現れていると思われる。また、採用時に前者は職業資格を求めているが、後者はSVQレベル2を有していることが望ましいとしていることにも、違いが認められる。

今後は、両施設が職業訓練として連携しているスターリング大学の、認知症介護の訓練プログラムについて、既に複数のテキストを入手しているので検討していきたいと考えている。

[本研究は平成21年度科学研究費補助金（基盤研究C課題番号：21530640）の助成を受けた成果の一部である。]

¹⁾ Living well with dementia : A National Dementia Strategy, Department of Health, 2009.

²⁾ スコットランドの職業資格は、レベル1からレベル5をもって構成され、各レベルの到達内容は、以下の通りである。

- ・レベル1 非熟練職の基礎技能に相当するもの
- ・レベル2 非熟練に相当するもの
- ・レベル3 技術職・熟練工・工芸職・監督職に相当するもの

- ・レベル4 技術職・下級官吏職に相当するもの
- ・レベル5 技術職・上級官吏職に相当するもの

『諸外国の若者就業支援政策の展開－イギリスを中心に－』日本労働研究研修機構、資料シリーズ、No. 131、2003年。

³⁾ スターリング大学は、認知症サービス開発センター (Dementia Services Development Center) を有し、教育と訓練部門を持つ。認知症の医療アシスタントや介護施設スタッフのための自己学習のコースがある。

